RIKKYO MOVE
More Valuable Education
立教大学　大学教育開発・支援センター

Newsletter
Center for Development and Support of Higher Education
22

開催報告

春学期シンポジウム

「動画で深める学び ―教材から授業を変える―」

［2018年7月10日］

学生自らが考えて学びを深められる講義にしたい教員が、動画を切り口に教材から授業を変える手がかりを得ることを目的として、池袋キャンパスでシンポジウムを開催しました。第1回立教大学教育活動特別賞の受賞者の内、各分野の特性を生かして動画を活用された3名の先生方に事例をご報告いただきました。学内外から43名が参加し、登壇者による授業の難しさとその壁を越えるための動画活用の試行錯誤のお話に、「是非ともやってみます。必ず。」など、自身の授業へとつなげる感想が寄せられました。

左から幡野弘樹センター員（司会）、平山孝人氏、金子祥之氏、椋棒哲也氏

事例報告1人目の平山孝人氏（理学部教授）には、反転授業についてお話しいただきました。100名規模の主に1年生を対象とした「物理計測論」において、データ処理の仕組みを理解しながら学生に手を動かして自分で計算できるようになってもらうために、動画による予習を課したこと、動画の収録方法やデータの格納場所、授業時間の使い方などの具体的な取り組みを紹介されました。

2人目の金子祥之氏（社会学部兼任講師）には、200名規模の「環境と文化」におけるドキュメンタリー映像の活用についてご報告いただきました。環境問題に文化論的にアプローチする際に生じる受講者と対象の時間的・空間的乖離という課題を克服することを目的としてドキュメンタリーに辿り着き、授業での映像の提示の仕方とその素材の特性の生かし方を具体例とともにお話しされました。

3人目の椋棒哲也氏には、250名規模の「文学講義331(近現代学日本文学1)」における舞台探訪動画の活用についてご報告いただきました。自らが作品の舞台を訪れて撮影した動画を媒介に、リアクションペーパーも活用しながら学生に物語の行間・背景・実態を探ってもらい、鑑賞の仕方の考察を深める工夫をされたことを、実際の地図やテクストを示しながらお話しされました。

質疑応答・ディスカッションでは、反転授業の科目による適性や、100分授業に向けた授業中の動画の意味づけ方などが話題となりました。見せる意図や「何を考えてほしいか」を提示すれば視聴後に課題に対する学生個々の考え方を問えることや、動画の面白さを「熱く語りかける」と学生に伝わることが語られました。参加者にとって面白い発見となり、シンポジウムは盛会のうちに終了いたしました。

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教　山路 茜

近日刊行　大学教育開発研究シリーズNo.27

動画で深める学び ―教材から授業を変える―

上で報告したシンポジウムの記録冊子を2018年10月に発刊する予定です。シンポジウムの詳細を資料とともに掲載いたします。
全専任教員に配布するほか、HPにも掲載しますので、ぜひご一読ください。

立教大学教育活動特別賞　受賞者インタビュー

立教大学教育活動特別賞は、教育内容や教育方法の工夫・改善により顕著な教育成果をあげた教員の功績を大学として顕彰する制度です。当センターでは、第1回受賞者の方々の授業の取り組みや教育に対するお考えを伺うアンケートを実施しました。本号では、このアンケートの回答をもとに受賞者のお一人でいらっしゃる法学部の倉田徹教授にお話を伺いました。

教室に来ることの価値を探して

法学部政治学科教授
倉田 徹

インタビューに先立ち、受賞科目「アジア政治論」の概要について伺いました。

「アジア政治論」は法学部の専門科目で**2〜4年生**が履修します。政治学科では様々な国や地域の政治を教える、アメリカ政治論、ヨーロッパ政治論などがありますが、その中のひとつです。法学部の専門科目は**4単位**の科目が多く、開講形態は、通年週1コマ、または、半期で週2コマです。半期の場合、2コマ連続、または、違う時間での開講となりますが、私は毎年**半期かつ2コマ連続**という形で行っています。受賞した2016年度の講義では、**134名の学生が履修**していました。

授業のねらい

Q：当該授業で大事にしていたことは何ですか？

アジアの政治は物凄く動いていますよね。今年は北朝鮮の問題が大変話題になっていますが、そういう状況にあると、世の中に情報がたくさん溢れます。日本人にとってもアジアは近くの隣人なので非常に関心が高いですし、学生も日常的に中国や朝鮮半島などの国々とどのように付き合っていくのか、考えなければいけない立場に置かれています。他方であまりにも近すぎる関係にあり、長い歴史の中で密な付き合いをしてきたので、冷静かつ客観的に中国や朝鮮半島について知ることは日本人だからこそ難しいと思います。最近、メディアやインターネットでは感情的で根拠のない情報が多くあり、若い人は日常的にそれらに接しています。そのような一般的な情報、特に間違った情報に簡単に惑わされないように、自分で正しく判断できる知識をもってもらう、これが最大のねらいです。

Q：当該授業で学生に期待していたことは何ですか？

今は一人一人がネットを使って情報の転送や発信ができる時代ですから、単に被害者になるだけでなく、人に嘘を伝えて加害者にすらなりかねない、非常に重い責任を負わされる危険な状況があると思います。したがって、被害者にも加害者にもならないために、情報を冷静に読み解けるようになってほしい、これに尽きます。

授業の進め方について

Q：当該授業をどのように進めましたか？
（例：全体の構成における工夫、各回における方法の工夫、教材選択の工夫等）

全体の構成

一口に「アジア政治」と言っても範囲が大変広くなります。そもそもアジアがどこからどこか、これがひとつの問題になります。したがって、授業のオープニングで地図を渡して「あなたはアジアをどこからどこだと思いますか」というアンケートをとりました。この答えは人によって異なりますし、正解がない問題です。アジアの定義は様々にあるので、色々なアジアの像が有り得るということをまずはオープニングでやる。これは学生に答えを与えるよりもむしろ混乱をさせるわけですが、一緒に考えていきましょう、ということです。

授業は3部構成にしています。第1部は、アジア全体に関わる、主に理論的なところを話します。アジアは範囲も確定できませんし、多様性を持っています。例えば、中国や北朝鮮のような文化もあれば、東南アジアに行くとより色濃い仏教文化、イスラム教文化などの多様性があります。それを含めた上で、アジア全体でどのような共通点があるのかを考える、これが最初の理論編のテーマになります。第2部は、中国の話をします。中国はひとつの国ですが非常に多様性があり、アジアを読み解くための様々な理論を使って分析します。これはメディアで報道されている中国分析とは違う試みです。単純に現象を追いかけていくのではなく、長い歴史と様々な政治学

の理論を踏まえて今の中国を見ていきます。第3部では、香港という都市に集中して話をします。ここが私の研究上、一番専門にあたる部分です。イギリスの植民地から一国二制度という形で中国に返還された香港ですが、非常に独特な政治経済体制を持つ一方、アジアらしい政治的な特徴も持っています。

なぜアジア、中国、香港という3部構成かと言う理由はもう1つありまして、最初に地球上のアジアやヨーロッパという非常に大きな地域の話をして、そのあとで国家のレベルの話をします。そして、さらに地方という、大・中・小の視点を持とう、ということです。国際政治学では、このように様々なレベルの政治に着目することが非常に重要になっています。この3つのレベルに着目しましょう、ということも3部構成の目的になります。

また、基本的には2コマセットで1つのテーマを扱っています。3部構成で授業をしていますが、それが横の分類だとすると、これに縦に貫く分類があります。1つ目がナショナリズム、2つ目が経済発展、3つ目が民主化、それから、4つ目が冷戦で、それらを組み合わせていますね。たとえば、アジアのナショナリズム、アジアの経済発展、アジアの民主化、アジアの冷戦…という形です。

教材の工夫

教材として特定の教科書を使うことはしていませんが、私自身がアジアを訪問したときに撮った写真をスライドで学生に見てもらうようにしています。各スライドに必ず写真ないし映像を1枚入れて作っています。例えば、韓国のソウルの街角で撮った韓国らしくない、日本語で書いてある居酒屋や日本料理屋の看板とか。何かと韓国は反日感情が強い国だと強調されますが、これを見ても韓国が反日感情を持っていると言えますか?という実体験を見せています。それから身近な場所ですし、学生の自由時間を利用して様々なアジアに行ってほしいということもありますね。

もうひとつは、アジア政治に関係する政治学、あるいは、政治学の名著などです。これは、昔からの理論の中に今を見る視点を持ってほしいということに関わります。そして、教室に来ることに価値を見出してもらうために、具体的に引用した部分を学生と一緒に読むとか、あるいは、感想を聞いてみるとか、その場での体験やその場にいる人との対話をできる限りするようにしています。

倉田 徹 教授

当然新しい情報を入れていくことも必要になります。大学の授業では、冷静に理論を使って目の前の状況に流されないことが重要ですが、現在社会で起きていることに対する説明力をなくしてしまうと、皆インターネットに流れてしまいます。目の前の事象は古い理論を使っても説明できなくてはいけません。したがって、最新の情報を毎年入れながら、変わらないものも残していくというバランスでやってきました。ただ、どうしても教材は増えますので泣きながら削っている状況ですね。

Q:当該授業で手応えを感じた取り組みは何ですか?

授業の中では、リアクションペーパーからの学生の反応ですね。出席に関係しないのですが、なかなか力が入ったものが多いです。私の意見に対する違う見方、反論、さらなる疑問を出してくれる学生がいまして、次の授業の冒頭の時間で「お便りコーナー」と称して、ある程度選んだものを読んで疑問に答えるようにしています。時には、学生の書いた内容と私との間で、結構な論争になることがありますが、これが一番の手応えでしょうね。なぜなら、情報を鵜呑みにしないというのが私の授業の目的ですから、疑問を持って聞いてくれるのはとても嬉しいですね。当然リアクションペーパーが充実すれば、それに応える時間が長くなり授業本体の時間が減ってしまいますが、私は授業本体を減らしてでも応える価値があると思っています。なぜなら、知識は別のところから吸収できるわけで、授業は教員とやりとりできることが一番のメリットだからです。

あと、授業中に時々疑問形の言葉を言って3秒くらい止まったりしますね。適当な「間」と言いますか、余白を作って考えてもらうことをしないと、惹きつけることはできない、言いたいことも結局伝わらないと思います。大学生は、これから社会に出て答えのない問いを自分で考える役割が求められるので、安易に答えを出さないように、できるだけ考える余地を与えるようにしています。

授業を聞いた学生がさらに学びたいと考えて、私のゼミに来てくれるときにも、手応えを感じますね。

Q:当該授業でうまくいかなかったことや苦労したことはありますか?失敗経験等も含めてお聞かせください。

最初は、大人数の授業に非常に苦労しましたね。現状、法学部では期末試験の一回で成績を出すのがスタンダードです。最初は中間テストをしていましたが、何百人もいる教室では結構大変でした。期末試験のように事務の方にお手伝いをお願いすることもできないので難しかったですね。あとは、中間テストではどちらかというと知識に偏った問題にしていました。期末試験で多少論述をしてもらう前提で、その前に確かな知識も必要なので穴埋め問題にしたのです。しかし、そういう形で問題を出すと、どうしてもその対策をする授業だと思われてしまうので、結局考えるという部分がなかなか進まないという経験をしました。今は中間テストはやめて、代わりに新聞記事を要約した上で分析する小レポートを3回出してもらっています。自分で情報を噛み砕いて考えないとレポートにならない仕組みを作っています。

教育活動について

Q：先生ご自身の教育に対する想いを教えてください。

コミュニケーションが大事だと思いますね。一方的な知識の伝達ではなくて、人と人との関わりを学んでほしいです。今、就職活動ではよくコミュニケーション能力が必要だと言われます。結局、人と情報をやりとりして、何らかの仕事を成し遂げていくことがほとんどの社会人に求められる能力なのだと思いますね。したがって、私自身もコミュニケーション能力が必要だと思っています。大教室の授業でも、自分が言いたいことをそこにいる学生一人一人に話しかけるという姿勢で話すようにしています。要するに、インターネット、あるいは、テレビとは違って目の前にいる人は画面の中のバーチャルの存在、二次元の存在ではなく、人とやりとりしているということを学生にも感じてほしいわけです。これからの時代に、大学教育がある意味生き残っていくためには、やはり一人一人の人間が池袋にわざわざ来るということの価値を持たせなくてはいけないと、一番に考えています。

Q：立教大学の学生に対する授業で工夫していることはありますか？また、どのような工夫が効果的だとお考えですか？

立教大学の学生は学力的にも、社会性においても非常に優秀だと思います。ただその優秀さが、時々私には物足りなくなるのです。この場ではこう答えておけば多分正解だろうという判断で先回りするところが割に強い気がします。その能力はもちろん必要で、特に人と付き合うときに相手に配慮する優しさ、相手に不快な思いをさせないマナーの良さは非常によく備えています。その反面、たまには学生なのだからもっと自由になってもいいと思うわけです。

ある意味ロールモデルが必要で、教師は反面教師であっていいと思いますね。先生が失敗談を話すと学生も安心すると思います。私も学生時代に旅行をして中国で飛行機が遅れてひどい目にあった話、野宿をした話、あるいは、食べ物にあたってエライ目にあった話などをします（笑）。一瞬、単なる笑い話のように聞こえるかもしれませんが、我々は教壇の上に立つ立場で、文字通り上から目線のときに、あまり上の人間だと思われると、学生はこの人と話そうとも思わないものです。ですから、自分の失敗談を混ぜ込んで、できるだけ人間味を出すようにしていますね。そうでないと、なかなか彼ら自身も自由になれないと思います。学生にはもう少しわがままになって、自分の本当にやりたいことをしてほしいと思うところがあります。授業の中で、お金は借りられるけど時間は借りられないということを私はよく言います。「アジア政治論」はそういう意味では挑発につぐ挑発です。海外に出向き、アジアの人たちに触れて、我々の常識が通じない世界に行ったときにどうしたらいいかも少し体験をしておいてほしいと思いますね。なんて言うかな、多少、ワイルドになってほしいと思っています。

インタビューまとめ：助教　藤澤 広美

受賞者アンケートから（自由記述より一部抜粋）

当センターが実施した受賞者アンケートは自由記述が全8項目ありますが、それぞれの質問に対する回答を掲載するには紙面が限られるため、以下に一部を抜粋してご紹介します。アンケートにご回答いただきました先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。

授業のねらいと進め方

受賞した授業において「大事にしていたこと」、「進め方の工夫」に関する回答では、以下のような記述がありました。

大事にしていたこと

正しく、美しい化学反応式を修得し理解してもらうこと。
本質的な理解に基づく、多様な問題に対する対処法の修得と、研究面で活用できる基礎知識の伝授。

進め方の工夫

各回毎で1話完結型とし、学習範囲を限定。90分間の板書を中心とする古典的な講義形式。
随所に復習となる応用事項を取り入れる組み立てと、各回毎の確認テスト。4回講義で１回の小テスト、答案の添削採点と返却。

大事にしていたこと

①学生に思考させること。そのためには「授業内容が興味深い」と感じてもらうこと。
　また、そのためには、授業内容と学生との接点を見いだすことに時間をかけること。
②この授業は教職科目であるため教師として求められる専門知識・技能の習得はもちろんだが、それに加えて教師としての生き方についても考えるきっかけを与えること。

進め方の工夫

①comfort zoneから抜け出させるために、席は毎回抽選（トランプ使用）によって決め、隣席とペアを作る。
　やや大きな質問を投げかけるときは、まずペアで意見交換をさせた後、クラス全体で自発的発言を募る。
②毎回の授業開始時に授業内容と目的を告げ、終了時にまとめをする。
③抽象度の高い理論を導入する際、その理論を深く理解させるために学生にとって身近な例を提示すること。
　その際、的を得た映像資料が効果的。映像が長い時は分割して注目すべき点を告げる。

他の受賞者の回答からも、授業を学生に対する機会の提供と捉え、専門科目固有の題材を扱った演習や体験を提供するなどの工夫がみられました。「学生の思考」を大事にしているという回答も複数あり、学生の身近な話題や関連する動画を用いるなど、教材選択や使用方法の工夫に関する記述もみられました。その他、学生の学習効果を高めるために、授業の構成について工夫しているという記述が多くみられました。

教育活動について

受賞した先生方の「教育に対する想い」に関する回答では、以下のような記述がありました。

- 大学という研究教育機関が取り組むべき最高レベルの「知」は、社会全体の公的な共有財産である、と考えています。そのため、大学教育に携わる者は、そうした「知」を誰もが触れることのできるかたちで伝達できなければならない（それをできるだけの力量を備えていなければならない）、と考えています。
- 大学での講義は、お金を払ってライブを聴きに来た人に対するものと同等、と考えて、90分間の組立をしっかりと計画し、板書資料は持ち込まずにすべて覚えておき、講義のライブ感がでるように準備をする。
- 当たり前のことですが、大人になる手助けをすることが教育だと思います。
  その手助けをする教師はエンターテナーでなければならないと思っています。
  学生を惹きつけ揺さぶり悩ませる授業をしたい。そして「自ら学ぶ大人」になってもらいたいと思います。
  そのための授業だと思います。自分がそのための工夫に手を抜くようになったと感じたら辞め時だと思っています。

ここでは、受賞科目にかかわらず、先生方の教育に対する想いをご回答いただきました。学生に身近な問題として授業の題材に触れてもらい、学生自身の成長につなげていくためには、授業における伝達する力などの力量、授業展開に伴う準備と工夫が大切であるという回答が多くみられました。それぞれの先生方の教育に対する熱い想いに留まらず、その教育の実現に向けた意気込みや葛藤が垣間見える回答がとても印象的でした。

本学の学生に対する工夫

「立教大学の学生に対する授業での工夫」に関する回答では、以下のような記述がありました。

- 勉強することが得意な、あるいは好きな学生に満足してもらえるだけでなく、これまで勉強することにあまり興味を持てなかった学生に、学ぶことの楽しさおよび学びを通した充実感や達成感を味わってもらえるような工夫を実践することが、非常に効果的だと感じています。
- 多様な学部がある総合大学であり、学生の意欲も高いので、新しい機材、重要なトピックを提示したときの反応がよかった。
  コメントペーパーの反応もよかったので、双方向性の授業にするよう工夫した。

ここでは、本学の学生に対して効果的であった授業の工夫についてお尋ねしました。学生の学習段階に配慮して授業構成を工夫すること、あるいは、多様な学生層がいることを前提とした学びを提供することなど、学生の特徴や段階に合わせることが効果的であるという回答がみられました。また、学生の学習意欲を高めるための教員の働きかけが授業の工夫として必要であるという回答が寄せられました。

アンケートまとめ：助教　藤澤 広美

第1回受賞者アンケートの回答は、当センターHPで見ることができます（https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/SitePages/winner.aspx）

第１回立教大学教育活動特別賞に寄せて

副総長（教学運営担当）
松尾 哲矢

本賞は、教育内容や教育方法の工夫・改善により顕著な教育成果を挙げた授業、教員を顕彰する制度です。この度、受賞された先生方のコメント（アンケート結果）を拝読しました。

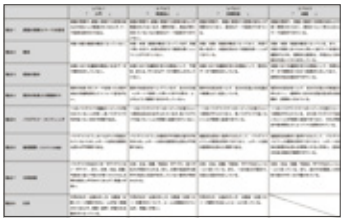
大学の学びで最も大切なことは、「ものの見方、考え方を学ぶこと」だと言えます。その意味で、授業での重点として、「常識をゆさぶる」、「時代との緊張感」、「正解のない問いに挑む」、「当事者性への気づき」等の指摘はまさに正鵠を得たものであり、それを学生が自らの問題として捉え、主体的な学びに繋げることに注力されています。そのための「反転授業」、「映像資料（自ら撮影した映像等）やリアクションペーパーの活用」、「学生同士、学生と教員との対話」等の工夫は、皆様の活用に資する財産だと言えます。

そして何より、学生を自ら学ぶ大人にするために、「工夫に手を抜くようになったと感じたら辞める時だと思っています」、この覚悟と教育への思い、私自身も肝に銘じたいと思います。

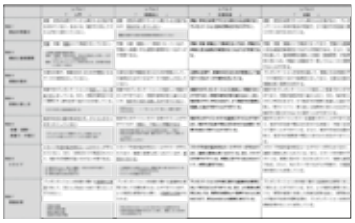
2019年度より、100分授業に変わります。学生の主体的な学びを引き出すべく、多様で魅力的な授業をどう組み立てればよいのか、これらの取り組みを範として、皆様で新たな歩みを進めてまいりましょう。

教員向けの「『ルーブリック』活用ガイド」を刊行しました!

当センターでは、主に初年次指導向けとして「論証型レポート・ルーブリック」と「プレゼンテーション・ルーブリック」を2015年度に開発し、専任教員・兼任講師の皆様が本学の授業において使用される場合に提供しています。また、新たに先生方にルーブリックの使い方をご紹介する「『ルーブリック』活用ガイド」を2018年度に刊行いたしました。ご活用いただいた先生方からは、「説明する時間が削減した」、「ゼミ本来の活動に時間を使えた」などの声をいただきました。皆さまも是非、ご活用ください。



▲ 論証型レポート・ルーブリック
（Master of Writingに準拠）



▲ プレゼンテーション・ルーブリック
（Master of Presentationに準拠）

▲「ルーブリック」活用ガイド

申込先（大学教育開発・支援センター） cdshe@rikkyo.ac.jp

1）使用されるルーブリックの種類（「論証型レポート」、「プレゼンテーション」）、2）使用する本学の授業科目名、3）履修者（学部・年次）、4）提供する形態（出力紙または電子ファイル）、もしくは、「ルーブリック」活用ガイド（出力紙のみの対応）と明記してご連絡ください。

新・センター長あいさつ

当センターでは今年度4月より、センター長が交代しました。以下に、新・センター長からのメッセージをお届けします。

センター長（Teaching&Learning部会長兼務）
栗田 和好（理学部教授）

2018年4月よりセンター長兼TL部会長を務めております理学部の栗田です。新米センター長としてセンター員の先生方、助教、事務局の皆様にサポートいただきながらどのようにお役に立てるかを考え、今も学び続けております。

現在の大学教育開発・支援センターは大きく分けますと二つの役割を担っています。その一つの母体がTL部会で、主として教授法、学習法を調査研究して大学に所属する皆様にお伝えする活動をしております。そしてもう一つの母体が教学IR（Institutional Research）部会で、経済学部の一ノ瀬部会長のもと教学に関わる各種データの収集ならびに分析を行っています。これら二つの部会は車の両輪の役目をはたすことが理想です。教学IR部会が学生の強みと弱みを洗い出すと、TL部会がその弱点補強のための方策を提案し、逆に実施された方策の効果を教学IR部会が検証していくなど、さらなる改善につなげるサイクルの樹立が今後目指していくべき機能であると考えられます。

さて、立教大学の目指す「専門性に立った教養人の育成」にとって必要なことは何でしょうか。人工知能が教育を含む社会に浸透し、より効率的な知識伝達手法が普及しつつある中で、対面の授業を主体とする大学の存在意義はどこにあるのでしょうか。

正直に申し上げて、私は現在それらの大きな問いに対する説得力のある答えを持ち合わせておりません。しかし、大学の皆様の叡知とともに上記のTL部会と教学IR部会の両輪を回していく中でその答えに近づいていけるのではないかと考えております。皆様の積極的なご意見、関わりが大学教育開発・支援センターに必須の要素です。どうかご支援の程、よろしくお願いいたします。

編集後記

今号では、第1回立教大学教育活動特別賞を受賞された先生から、授業での取り組みやご自身の教育に対するお考えについてお話を伺いました。受賞者の皆さまにご回答いただいたアンケート（自由記述）からも一部抜粋してご紹介しておりますので、ぜひご覧ください。当センターでは、これからも授業の実践例など、本学の教育改善に資する情報を発信してまいります。（藤澤）

「MOVE 第22号」
立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2018年9月26日発行

発行　立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel：03-3985-4623　Fax：03-3985-4615
E-mail：cdshe@rikkyo.ac.jp
http://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html